

落為
清標

春風日記

三編
上
杉村春浦著



A517
5

春風日記三編の序
 浪速に梅の春風の後ふり
 深き日記を今も三編のまき
 小梅の南路に折る小春の離れ
 里字の鳥の名なりわさるるもの
 小春が真樺の軒端に樹の枝

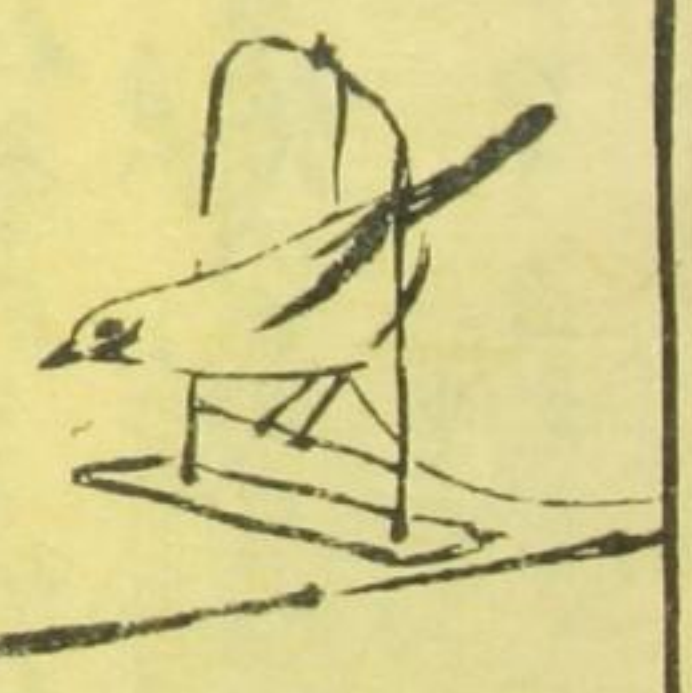
櫻雨園主人著
 松齋吟光畫

落華 清談

春風日記

三編 二冊

東京二書房合梓



48-7511

010190517778

中なかつ競きやう福ふくくく見みんんをを芳よしりり好このまま月つきのの鏡かがみを
 むむらら雲くものの聲こゑかかくく家いへのの浮う世きよのの情なさけ態たい
 上うへままてて志こころをを陰かげ日ひ向むかひひたたるる候さうににもも
 茶ちや心こころにに能よいいとと嘉かとと三さん障しょうのの森もり我われ秘ひにに
 ららりり船ふね鳥とり苦く勞らうはは遠とほくく妹いもとと春はるをを
 心こころ解とかかららぬぬよよおお生なまままのの芽め出でててくく流ながれれ
あさかみまらううーとが

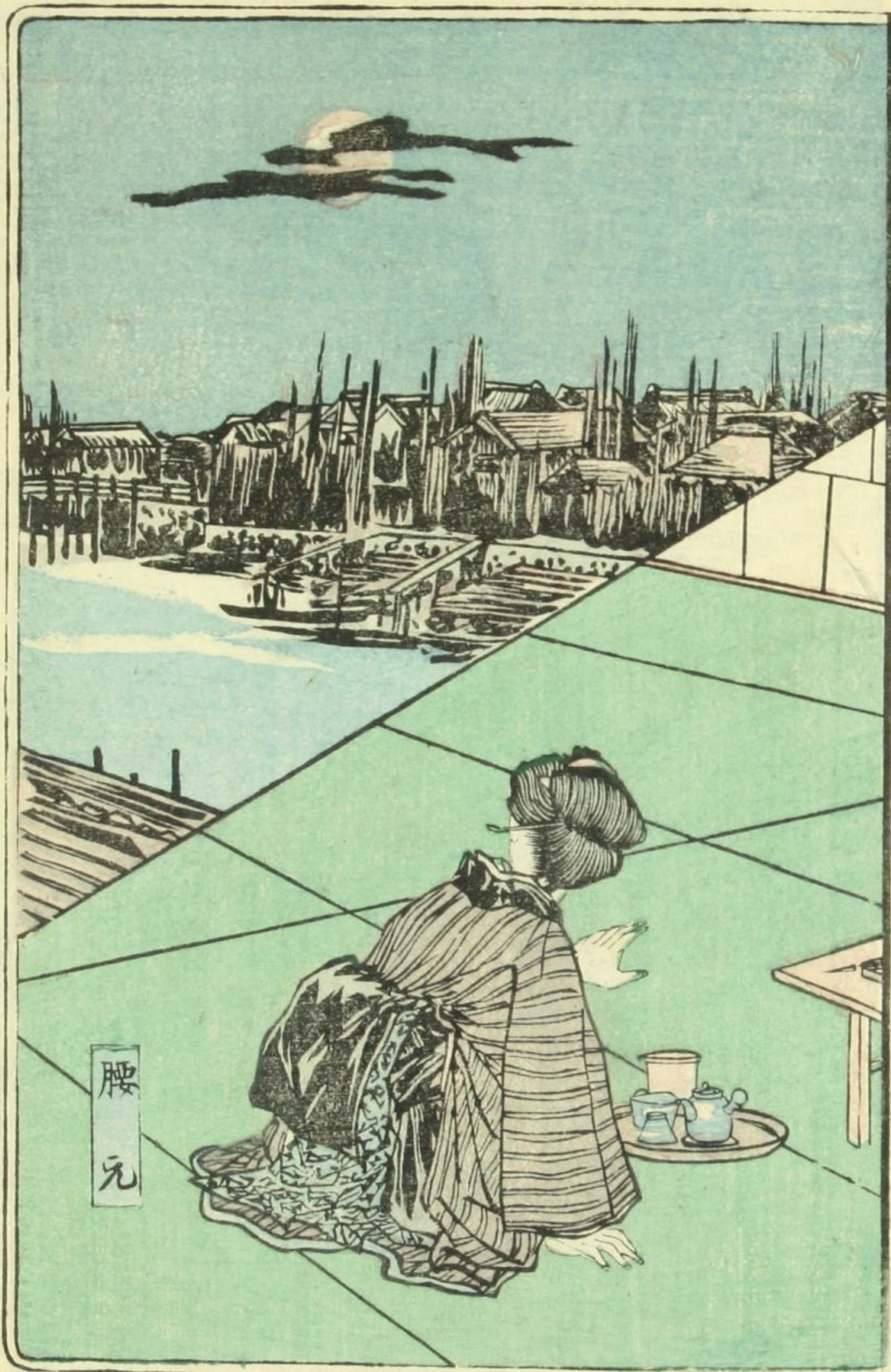
春風三〇ノ二

ぶぶんん文ぶん法ぽう法ぽう師しああららるる願ねがひひ
あん

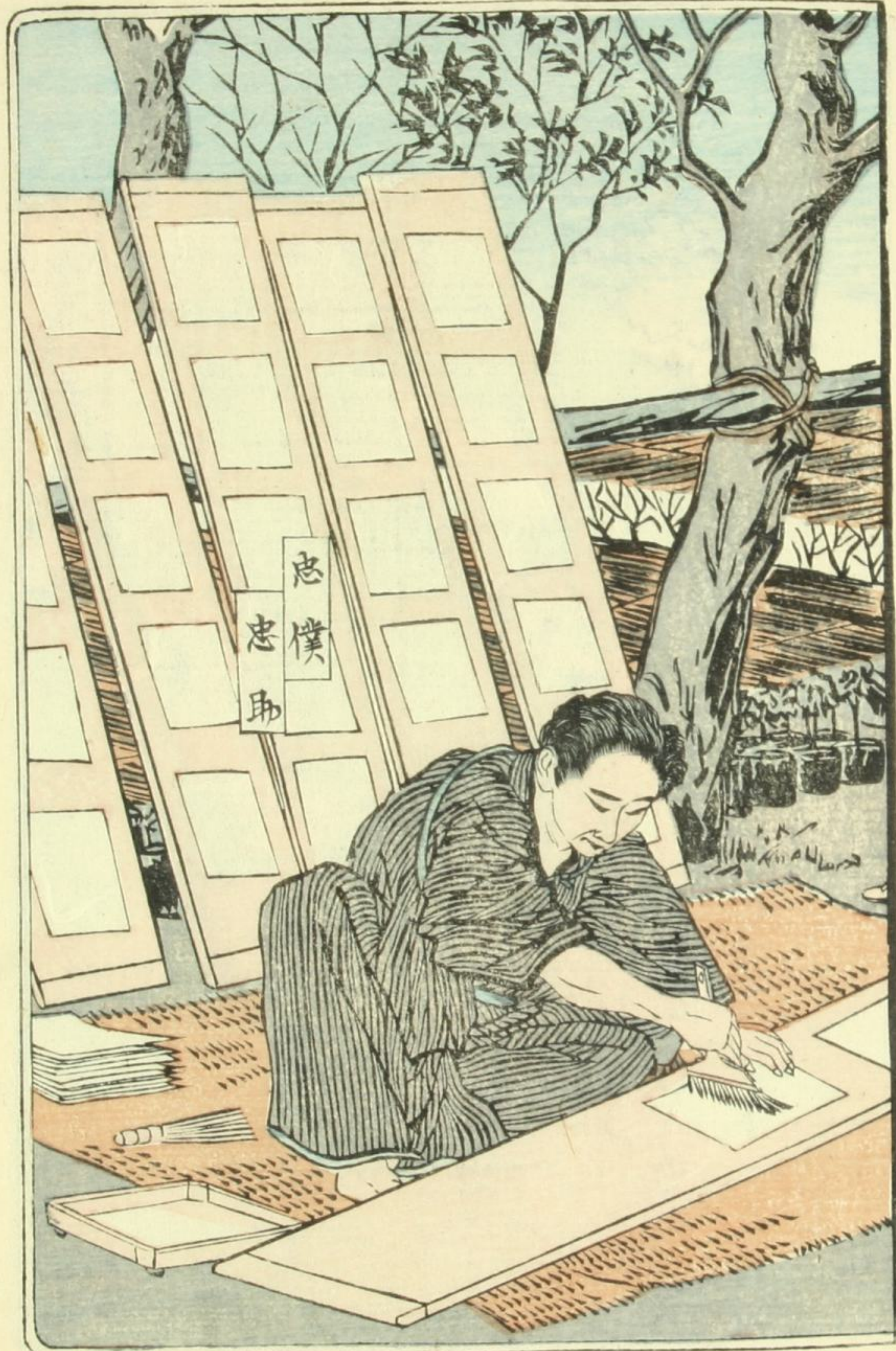
于時昭信平四幸第八月初旬
 撰白園中の事書し巻を撰

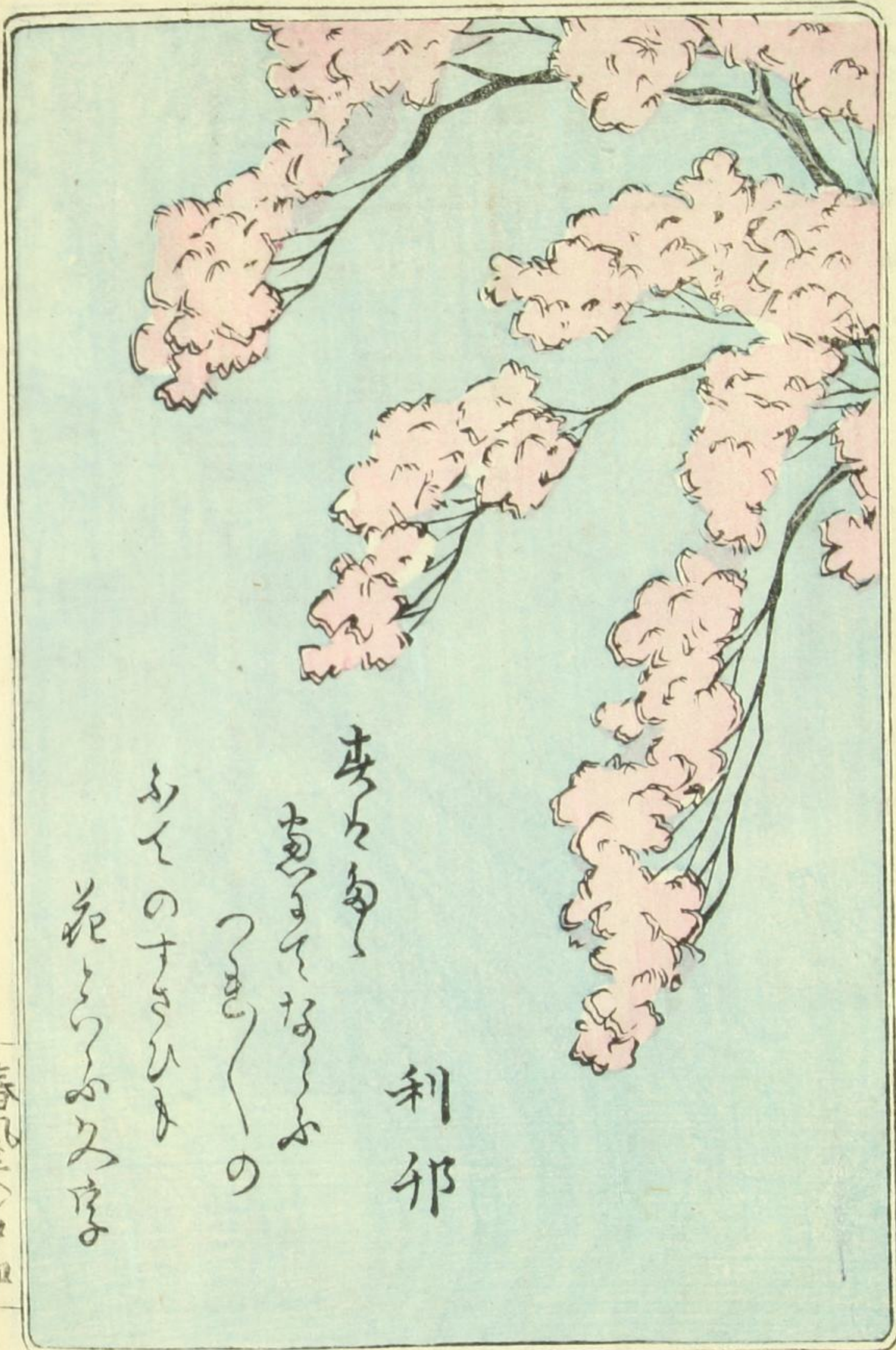
柳東主人老圃法





春風三口ノ二





利邨

春風日記

三編之上

東都櫻雨園主人戲著

あはれなる

花とらふ文字

春風三編四

落花春風日記三編之上

東都櫻雨園主人戲著

第九章

信孫バ如の徳由今の誠の軒並びと彼の梅曆小
 由流しをゆる小梅の里よ此秋より母や候一げ
 小信む若の根岩の里より移轉るる上お陰正之
 新母と忠義の忠助と三個暮一も時め候々宿話
 町ふありーーい響りゆかちりし今の身の新果敢

くもぬりきし我如何なるかと存ぬるも
支配人の茂つるが堤花と根家の別荘小保蚕の
為めと追ひ掛ひ己が隨意とて高業りて家内の事
や取り納ひ素より心の曲まらる。放蕩無頼の癖
者なれば人の意も適ふやう編み変の工となる
ふと一時の得意の舞文けもよと利業る者と叫
ましつゝといつゝ元了世金と頼り娼妓買中
娼妓狂ひ意ふ叶ひ娼女と思れば小生業る家
と扱へる團は益まつ。明幕の幕小遊びて常盤や
極め湯水の如く金銭やきふ物り。帳尻の序次
ふ合ぬ送る標記定果へ手解ふ空の附くやう金
ふ遊ばせ遊蕩由想ふ業所ふたふささるのみ。店
は仕入しおお由意切まらる。嬉し〜門取る事
もたふぬゆ〜得意も落ちて日増しふ出で入る
客中穉なるふと流石好智の茂る由是でいね
思按や代え一番不意ふ儲けむの此身代へ維持時

細く物しつと物とる別界中此程横濱より洋銀お
場の盛んなる吐しや所くより是こそ幸ひ一ト
袖起しふち儲けやなさんよの心配するごとく
づゝぶと子育り任せふ借り込だり又の家産や
抵當ふて借りられたる丈け借り尽し漸く資本或
借酒つゝ横濱着して出張し洋銀お場ふ熟りし
所始めの程ハ都合能く堅少の利益ふ成しつハ
此狗築ふて行く時ハ巨萬の金を儲らんふハ何

條難き事おさんと始めの意ふ引代えく有ん限
りの金とりつて借懸けし所が思はく遠ひふ今夜
ハ豊洲の大橋より是の金や借戻され横濱よりさへ
行くもやがねば病途げや倅し了東京へゆりし
見れば病方から不義理の金の借戻厳しく後方
つぎつぎと所の病ふ熟りし品物や賣代なりし
笑少の笑や己が暑極しつ先程や臨去ふたは
と大橋よ申用意やせし店ハ修あき去り小先

上方と志ざし 東原を跡より 大坂小落着きし 一りバ
是より 道中の来ることも 迹ひ 陰をるふ 由方便より
されども 空しく 暮さんふい 素より 子落の終へな
ぬべ 何ありとも 高法を 一日や 容易過さんと 想
つど 此の 始めふ 子落の 終へ ねが 眼ふ 珍
らふしき 女此さ 母見物な さんと 旅舎を出て 堀
の 行吉 夫も 与 阿流 此か 流より 南北の 是を 宿 或は 宿
津 桑田 山 本 備ふ 宿 此ま 一 夫も 神 不 知 此や 知れ

はとら 湯も 巻 巻の 曲者 小 意 獲の あと 人 例し 存し
まより 何れ 彼妻 見物 小 一 月 余り 由 日 費し 難し
之れ 女 難せども 是と 云ふ べき 高法 小 想ひ 甘さへ 亦
ら ぎまの 今 日 由 軽か 見物 だが 一 所 實の 終へ
往 難し 途 中 跡より 勢 也 難し 者 あり 惟し 由 終ふ
知己 者 あり け 妻 び 小 ぬ 風 程 あり 往 跡 中 也 是 也 迷 あり
何の 男 小 口 小 番 跡 終ふ ぬ 難し 志 終 さん 小 終 云 ぬ 了
是 終 と 面 見 合 世。 あり へ 丈 師 さん 番 跡 終 さん 終 あり 所

を愛つゝお此を思後を物舎何の鬼由那れナヨト
氏所を久し様小をゆしやせうと様柳屋へ健ひ行く
○備後後柳屋とのよの糸糸あさういさう小無き小
耕程解あを隠る甘ひ物と解へ一個茶づ小四小
盤村家の様柳あを飲を食ひやちまゆ人様うけやと
あへるよ〜 ○湯了丈物展らうのふ個ハさ
向ひあを飲をながう時小丈物さんおめくの牙齦
のう〜えづい糸糸あをゆくハ破産者ともいふべ

き年うよ見受るが勅一々今でい様ざるうとすき
く丈助の天窓と様き家路さんよなれでう小園
の柳をよ死七一小送ひ紗小も周迫て居るよ愛藤
る一が喧嘩の種あう嬢女と私か離れ吐さまう
ら様法と去き仕事と為やうと思つても本か
落るる様柳で甘く吐一がおく所で様産道への
紗も面切一がなうぞ小舞りやア猶の事仲間
奴輩ハ見下げり一思様も屋と此其頃幸ひ古ひ

知己の者が東京へ遊びよ来たつので思ひ付ひと
今の不仕合せを割つて吐いて寝んぞう層云々破目な
ら仕方おへはせよと一所よ一所よ一所よ一所よ一所よ
が庭ひとまゝの地へ一所よ一所よ一所よ一所よ一所よ
ちかちか小物の堂でもあつてやうみなりちやア
庭が交際ふ道を骨が折やまぜて産婦未産と遠
つて散銭が何ぞ可うのと餘慶が去つて勢一様稼
ひぞ分ぢやア好む酒や女界の出まぬくが所變

れば品賣るとやうに官つり者が取付くみやア
誰れかお地が社ひりんざ何と番頭さんおめく由是
かど吉面目を高法二種お花やきらうきより勘弁
まゝ人びんぢやせへ併今役のお登りの勅云ふ事々
知つぬへがお店のお志やア折りやまぬへお由ひ
兼いおめくう骨折しらす何程うりつての真
村もありやまゝと隨分吐一の相子みやア及びぢ
たぐりありやまぜと折れと包む友々ねい何

河豚汁
と
仲るの
あ
う
郎

哲佐丈助



好悪茂之助



さ秘の身の上も別れ之深い七変化一つでな通り
の具実ゆへ甘く根室へ進こんでまうと時方
狂言と書さ所が十分小迷ふ少由金の廻りが悪
くおろここと倣ひ喰ひ遠ひ敷い不筋を借金う有
るのと除けふ上方見物何とや骸の振かすや其
地へ付て見やうとい想ひて見ふ知己のたう
つとわぞおめく小遊こい地獄で仏の大尊後あ
ふ方層ぐと始めくく果然思ひ美のどろろぬは
町

の具形と始め跡い込つて居るごらうお野の毒と
も想ひも忘ぬくが一時のおめくが居なくありや
しと形を付けやう少由晴かす棒で窮迫さう
何さ曲り然つて身代や再び起ま奉防が出来る
見込が何ものちか矢意ふ流しに志みひのどが
還つて今ぢやアる藤共形も氣楽で海で居る
う其地へ来る少由氣を配り當分時の消るま
づる飛びぬるのいなくおくと陰れやうまを探

つゝ見ると私わがが宿しゆくを出でた路みちで一時ひとときの大層おほきよう踏ふむど
が身代みしろ賜たまふと吐はが出来でき同どう否いなと始はじめめ諸方しよほうの借かりりや下
筒つづふまうとめ貸方かたへ道具どうぐや何なにやや送やう付けつけく小梅こづめ
の方ほうへ送やうこんど由よしおめくへの知しつてゐる忠助ちゆうすけが利効りきう
めうーい立働たちどき今いままで由よし一所いしょ小指こさしるごううう人の吐はふ
吐はひうふやア後家おんきまの身許みもとハ上うへおめで大方おほほう大家たいかと云
ふととが何なんとも吐はふと付つりやア能いひみ其そのお體たいで
由よしそれそれが能いひのふ後室おんむろと始はじめめる無む名な由よし新形しんがた能い

つゝ若わか親おやや精せいんで救きう助すけてのふつて由よし迷惑めいわく能いけ
一人ひとりと海うみかひ義ぎ理りがお白しろごかう時とき長なが氏し様さまで
海うみ邊へへ再びふたたび店みせを設しやく置ちが能いひと人の云いふの由よし
まなひとさまぢやア茂もらおさん勅とくせおめくを
東とう条じょうへ送やうふおもなるめくかう是これくご昔むかしの
親おやおみ親おやんご仲なつるく魚いさなさへ悪わるひことなを板いた
目のなないおめくごうと勢せき亭てい踏ふまりやア親おやおみ株かぶ
あやア難がた作さのわくア茂もらおさん戲あそ波なぢやアおめく

花程むむぜはくし時よ千地せんちの女にょの儼げんしるのし能い
ひざろろまごんぎまひ隨分まごんぎまひ時意ふ叶つこのがありやまろ何さ遊あそ
ぶふも遊あそのち一いちぢぢ交まじりやうまご見ぬくくまごよ
様よう子こが知れやせんまぢやアさ己おのれ考かんがかお業わざ内うちく是これか
吾われみふ出でぬけやうふの形かたち地ちの能よくぬくわふ志まん田ぢ
とまやう一いつ所ところふ未まぬくと操くわんげや徳とく屋やの勘かん定ぢやうを成なりは
新あら所ところの或ある茶ちや屋やふ入いり未まぬり是これより二ふた個こゝろの夜よと昔むかし
遊あそび明ありて其その翌あつち日ひ文ぶん函かんが招ま合あけよて幾いく二ふた舟ふねも

彼の親おや方かたの子こをとなりなり猿さる養やしやう過との仲なつるふ入いり
わが同どうより悪あくふ文ぶんけくる事こと由よし五ご替か時とき日ひ月げつと過ま
そふち實じつふ叶あひのふふとなり考かんがをとぬれ能よ
立た廻まわるる忽たちち仲なつるの所ところ先まに能よく今いまでハ垢か地ちは
云いふふ及およびむ五ご幾いく内うちふの浦うらまで消くえぬ者もの
たき種たねふ名なの賣うるより身みふ過とる業わざ難がたい日ひふ過ま
舞まるふ付つけ軍ぐんの入い費ひの多おほけむが能よく少すくぬ業わざと働はたら
らねけ白しろ鳥とり等ら悪あく人ひとふ一いつ時とき知しくの如ごとき昔むかし後あと

と得善人必不ふ幸し遇あく天てんの秤はかり量りけ公こう平へいちりど
どと悲かなしみ患ある者もの阿あれどもそハあの正ただ者の徳とくと云い
たば一時いちじの榮えい誉よ既すでむむぶぶざるのそかん何なにぞや天てん
の直ちかなるやゆくく極ごく惡あく人ひとふ始はじめ終しまや金かねくまるる後のち得え
ささむむべき不ふ消しょうなな一いち善ぜんふふ一いち必かなず善ぜん報ほう阿あるる不ふ交かう
の終おひりみつつれば自おの然のかかるる惡あくと懲おそむの積たかままるる事こと一いち

第十章

徳とくて堤つと元もとハ茂さかるる身みが計けいみの測そくふふを身みりり一いちくくが病やま

ひ中ちゆう序じゆ序じゆ小せう重じゆうくあり治ち療りょうささくく由ゆ見みええざる
一いちヤや彼かの忠ちゆう助すけが丹たん精しやうと老らう母ぼの身み當あたや痛いたきけん
此こ種しゆ業ごう治ちの利きりり由ゆ見みええ全ぜん快かいままるるき容よう休きゆうふふ二に個こ
が能よくびび云いちんちん方かたなく今け終さいハハつつつつより心こころ地ぢ宜よろし
と小こ来らい目め和わの長なが閑かんなるる小せう日じつ阿あのの擗せり子こヤヤ的てきけ
信しんげげ危あやの暴はつをを誣しよめてて括くわくく小せう忠ちゆう助すけハハ孝かう弟てい本ほんよ
く極ごく込こみみヤヤ掃さう除じゆああららぐぐ堤つと元もとの孫そん重じゆう敷しきヤヤ觀くわん
き一いち旦たん形けいささぬぬ今け日じつハハ大だい層そう能よくいいかか天てん氣きふふなりりまま

く初お天象が能ひ日あやアお病氣よ由葉よなり
ませうと想ひませやうで所吐いまま「さうよ初由
風が何のうりあまがく「降れると何となく鬱集
中うぶか今日何ぞい刺然と「さ意持ふなる「なる
程お顔の急濃由露がど冥「くんえままよ「ア初
うま「能く「人並ふ今日なんぞの日和あやア
出魚さお相ど「ナニ最直ふおあ何なるさるやうあ出
末まま若ひ方の勢「能ひと難化なく全快まま

さうで所吐ままよ「おまへの後ろふ花があるのい
何だらう「懸い山葉花ごさうで所吐まま若の観
又が丹精「して能ひ花の木や附ひごのぶと自勝
ながら出「ま「「初由感心る物ごぬく山葉花
のやうおやアぬく園で苗葉さ今おやア盆栽が流石ご
か「若の家あ由能ひのがあるごらう「ナニ盆栽の
所らのへ後日の仕入物金山の手でな「のちやア
能いのへ何うままま「「さうくも知れぬく花

高人と縁日やの大概向島わら堀切が持切りの
塙而どわら堀切？ 志願今日のおまへハ体服のり
アさうぢやア所中ません勢はりの都合がありま
アさううわく遠みやア骨止めや休ぬへる働くむら
里ト今難が修くぬへ又おめくふ頼をれでもあ
と慈母さんとの個が困迫るよ 勅致して唯で休
暇むやぢやア海ません第一私が急情まきと感
人がきへません 衆親方よあつてままのさぬへ

ナニと始めと時ハお葉代のはじめもたれハ能ハか
と想ひながら所病中の事できかハ 別所お被
由致さたので始めまこのが今ぢやア多忙ハ
やうみ言くかハ注文がけりままのでお葉代わら
月との宿ひまで来みやつと替けまきうと 勤由
所心配のありませんとおまへハ混花の居る様側
み獲や聴ける 実におまへの感心かお急ご時るも
慈母さんとおめくのさうやうハ両個で済まらる



山菜花
や月白
たりの
よき
四角
守

堤花

春風

うよ人の落目小成つゝ時ハ不常ヤまゐるゝ御出
まゝ恩おんよなるゝと人ごとと俱とも小苦学くがくヤまゐる者ものハ今
時とき少ヤアあゝのんぢやアわ物ものヤハ物教ぶつしやく一ひとまゝ一ひと松
たんだのハ知ちかゝのの名公人なこうじんといお思おも由速よしやくひまま一ひと絶
までも鳥形とりかたさぬの御軍運ごぐんうんヤと及およぶぶたたぐぐむむやや一ひと
ままたた一ひと筒つつででつつりり中ちゆうででもお家いへののねねよよななももああけけりりややアア海
ああいと想おもひひまま一ひと家いへ小見せみああげげと煮にきき集あつめめハ今いま又またで
ゆわゆわくく子こ信しんのの時ときかかしし兼かね知ちがが初はつりり體たいヤ達たつ者ものふふ一ひと

了りょうかかめめくくのの子こ助すけけけ小勤せうしん表紙ひょうしヤ展てんららいい相あいのの清せいかかむ
つつかかししひひふふ合あひひのの身みががああららるるごごららうう一ひと門もん戯ぎ作さくヤ
作さくののちちややアア結むすけけまま人ひと安やす君きみ方かたふふ形かたちななままああかからら出で来きま
まま相あいのの身み一ひと不ふ潔けつららととととんんかかととちちううんんどどのの初はつめめ由よし能よ
いいととななるるまますす一ひと日ひももああららくく御ご金かね使つかたたららるるややうう小形せうがたひ
まままま一ひと支しのの是こゝ形かたち養生じやうじやうヤ能よくく一ひとそそままくく能よくく志しななくく一ひとち
ややアアかかららああららくく一ひと今いま形かたちハハかか葉はののああららりりままままらら一ひとふふんん一ひとナナニ
年ねん末まはしし後ごむむのの由よしあるあるああららくく半はん後ごふふ石いし小形せうがたけけがが能よいいよ

一 夫あやア小僧ややりまきく、所容体や書ておき
んちさひまき、一 別派日小坊、能ひのぶか下書な
くつても能くろうと想ふよごう、梅井先生の療治の
功者な相ご、一 下切りのやうぢやア、初づると存トす
る、
一 坊主町までまわらまき、一 先生小伺ひまき、一 寺
時何と云作つ、一 随分重ひ病氣づが直治見込が
あるのぶ、一 録り心配を忘たのが能い、保胎流の
病ひの進くでなくちやア、急ふに辨けねくとお

作ひまき、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
づら、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
か、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
づら、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
あ物の何、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
標ま、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
と想へば、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病
ま、一 一ハアと、胎流病をやアあるわく、血病

ら郵便で夜よ来たのえ得物のいで御座ませ
う何と一つ致らぬ返解やゐてお送人なうい
まーい何ご今の身の上ぢやア歌妓買おんぞ
の出来る幾程でもあるわー歌妓買とらふと何ご
か世帯も五月糺やふお物の小松さんごうてよお
客も休まうと承ひおまのぢやアなう唯所病氣の
事ごかくか逢まふてお見舞う言いたひと
何とぢやアわりませんうだうと逢てやうと動不

まおめ人の妻いひ此や知るめへが那の小松とい
唯の一度王子であつて切うさうお由深濡ぬ
と云ふぢやアなう小園の死とこのや所ひさむら
里下色の急のと濡れ糸の幕ハテット由なうさう
い忠助ごつてもお替りお替りなうお由兼知や致
して指まをのさ係此方が盛大な時形れ是れ云
のぢやア高貴柄ぢけ面白く御座ませんがまう今の
所を察してまお身小病つて居るのや返解由云お

と云つちやアむがなひやうで那女の突悪を不ふ能
 うしひむ指がまるやうやまはくし一まのお中くの云ふ
 通りど煮せむづ人も煮のなうぶまが物のはつれも
 是よりぞ知ると云ふ其内何と何と云ふ一のめと
 へ感じしと何と何と返辞や志中う二其思ふか
 ら所返辞より私が方角一葉う二一席ふイト
 赤や鳥般の思ひの初ごと云ひ了送りませう層は
 うやア那の妓も嫌しが望ませう大層思ふ懸け

了指やうや可笑は一汗一ナニ案の私由は写小露さん入
 垂て出して置してまがありませ一何所をこのど史君
 のお悪ひ家中ふ引おの志る程やう人々よと一うう
 大方層がううと家一の如くまおつて見ると小露さん
 が初う鳥般ふ垂して其乃と程もませねと今ぢやア
 大病の事と物と初しや手軽く出るをふいのかた
 勘ても能くありさうさうやア私が電燈を懸けらう
 と云ひても病葉がお悪ひのなう是程懸せて呉ら

と云ふあやア込りすし若し時電伝と熱け了か
くれ方々任吉郎の船そよ津元の師匠の因が何る
わしを所ま心と約束してやのと腹一をきります
ハア重徳元の次通と云ふのり延よ後のもろろ
夫の今娘めすすひとぬがわめくの日頃おまをのふ
形なる小露を相子おしちやア込りころろ一実子露枝や
露枝なんぞとほと利ととのわいおぢやア隨分意橋が面
倒で込り切りすしころろ一七日の吐が可笑かつせ

へう露方が能いけおで行つて日よゆ々速く金使だら
と吐き所へ次の名より老母の輩を家と扱へ茶盃
お茶せつて持来り燈籠と忠助お茶を汲んでお茶
ふつと今まぐ小露の輩と吐て居このとよくれ
うと想ふゆゑるのそろさうお類やして忠助の輩
本を揺るつて見えう足の土と靴履ぎの石へおま
付けころろ一お茶をながお茶をこよお茶の
おまのお園子のゆつこのと扱てあるよ一露子

より園子を持ち来り「サア忠助様とお世へお尋ね
ふらんお物の能くならいから妙種様やあげやうと菓子
菓子より種々菓子と出ま「是れいなりぐらう両座市
今日のお天候の能いせくら兵衛さぬのお筆色由大層
能いやうで「ア、頼免が能いやうぞねく是由おまの丹精
だうと想つて居るよ「ナ動つ「「まて笑張り且
那さぬ御運の寫しひので「速く能くならてお尋ね
私もお物の家へ種々相違ふ様で「さうと想ふよ

「今の方でもおれば「お小評の體ふなり「お尋ね「ア、そ
まぶと私もお陰が「さやしく出来て能い「お尋ね「這度こそ
お後家さぬお骨折で居らう「やうませう「お忠助も
一生懸命で旗上げのや振へ致しませう「おア、お尋ね
由幸防が勅進ぐよと云ふ時「由正年十二時の辨施の
音ズドン「オヤ罷やドンと云ふ「ドレ私もお年喰の儀へ
やい「「お尋ね

落花 春風日記三編上終
清談

